
 シンポジウム 4

難治性排尿障害の治療 game changers

司 会	野 口 満 (佐 賀 大)
	宮 里 実 (琉 球 大)
演 者	本 田 正 史 (鳥 取 大)
	渡 邊 豊 彦 (岡 山 大)
	東 武 昇 平 (佐 賀 大)
	武 井 実根雄 (原三信病院)
	芦 刈 明日香 (琉 球 大)

司 会 の 言 葉

超高齢社会にあって、排尿障害をきたす患者は増加の一途であり、泌尿器科医だけではその多くの患者を診療することはできない。このため、一般医家の先生方に排尿障害の診療をカバーして頂くことになる。現在、排尿障害診療に関する多くの診療ガイドラインが作成されており、これらガイドラインに基づく診療により、典型的な前立腺肥大症や過活動膀胱 (OAB) による排尿障害の多くが α_1 遮断薬、PDE-5 阻害薬、抗コリン薬、 β_3 受容体刺激薬、5 α 還元酵素阻害薬などの排尿障害治療薬でコントロールされているものと思われる。一方、我々泌尿器科専門医は、一般医家の先生方が治療に難渋する排尿障害を上手くコントロールすることを期待されることになり、またそれが重要な役目とも言える。排尿障害の的確な診断のもと薬物療法の組み合わせをはじめ、新たな治療法を導入し患者満足度の高い排尿コントロールを目指すこととなる。本シンポジウムでは、難治性排尿障害治療において game changer となり得る新たな治療を5名のエキスパートの先生方に、それぞれ新たな治療の適応、有効性、注意点等についてご紹介頂く。

まず初めに鳥取大学の本田正史先生に2020年から本格的に治療が開始された経尿道的A型ボツリヌス毒素膀胱壁内注入療法 (ボツリヌス療法) について概説頂く。ボツリヌス療法は神経因性膀胱を含む難治性OABに対する新たな治療で、OAB治療のまさしく game changer と言える。この治療の実際の手技を含め有効性と注

意点、問題点を伺う。次に難治性OABのもう一つの game changer である仙骨神経刺激療法 (SNM) について、岡山大学の渡邊豊彦先生にお話し頂く。この治療は神経刺激のデバイスの体内植え込みによる治療で、薬物療法が中心であるOAB治療のパラダイム・シフトと言える。外科的処置が必要でやや侵襲性のある治療であり、治療適応と有効性のみならず、有害事象、長期効果、さらには費用対効果についても考察頂く。3つ目の game changer として、排尿障害の中で最も不満が強い症状である「夜間頻尿」に対する、デスマプレシンによる治療について佐賀大学の東武昇平先生に症例を提示頂き、ご自分のデータを交えながら概説頂く。デスマプレシンによる治療適応の多くが高齢男性であることから、デスマプレシンによる低Na血症や心不全が懸念される治療である。このため有害事象をおこさない工夫や患者指導についても併せてご教授頂く。4つ目は、「間質性膀胱炎・膀胱痛症候群」を原三信病院の武井実根雄先生に取り上げて頂く。2019年に診療ガイドラインが出版され、ハンナ病変を認めるハンナ型間質性膀胱炎とハンナ病変のない膀胱痛症候群とに分けられ、「間質性膀胱炎・膀胱痛症候群」のタイプ、病態による診療アプローチが検討されるようになった。しかし、未だ原因が解明されておらず、根治治療法も確立されていない疾患・症候群であり、今後期待される治療を含め概説して頂く。最後に、女性骨盤臓器脱での排尿障害について琉球大学の芦刈明日香先生にお話し頂く。女性骨盤臓器脱においては、OABあるいは尿排出困難など多彩な排尿症状を呈

するだけでなく，外科的治療後に新たな排尿障害を呈することがありその予測は極めて難しい。芦刈先生には，自施設での症例を提示頂きながら女性骨盤臓器脱に対する排尿障害治療を検討頂く。

本シンポジウムでは，実臨床でご活躍の5名のエキス

パートの先生方から，難治性排尿障害に対してブレイクスルーとなる新規治療および病態概念について概説頂き，泌尿器科専門医として難治性排尿障害の克服，コントロールを考えていきたい。
